

# 大空 (生徒・保護者向け) 46号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和3年9月28日(火)

## 言葉を贈る—巳俊先生の話—

### □本日の概要

- 1 岩切正一郎先生の講演の中に出てきた橋口巳俊先生は本校の創設期を支えた国語の先生である。研究者のような学問レベルに裏付けられた国語の授業に惹かれ、私も国語の教員を目指すようになった。
- 2 橋口巳俊先生は授業を通して言葉の魅力を授業を通じて生徒に伝え続けました。そして、お孫さんにも、絵手紙として「言葉」を毎日贈り続けた。
- 3 岩切正一郎先生が語っていたように、出会いと美しい言葉を大切にしてほしい。
- 5 本日のNFC 感性(美意識) 自他肯定力

### □岩切正一郎先生の講演を聴いて

9月22日(水)、学部・学科講座(高校1・2年生対象)において、国際基督教大学の学長である岩切正一郎先生の講演会がオンラインで実施されました。岩切先生は本校の第1回卒業生であり、本校に来校することを楽しみにされていました。オンラインになったのは残念ではありますが、もし昨年でしたら設備が未整備でしたので実施できなかったと考えると、オンラインでもお話を聞く機会が持てたことはありがたいことだと思っています。

さて、岩切先生が講演の中で、宮崎西高生時代に影響を受けた、冬でも半袖、下駄履きという、ちょっと変わった国語の先生のことを話されていましたが覚えていらっしゃいますか。橋口巳俊(はしぐち みとし)先生といいます。講演を聞いて、岩切先生と私は同じ国語の先生に習ったことが分かりました。私は4回生ですので、巳俊先生は1回生の岩切先生を卒業させた後、新入生である私を担当されたのでしょうか。岩切先生の講演に恩師の名前が出てきたことに、何かシンクロシティ(意味ある偶然の一致)を感じました。橋口巳俊先生は、宮崎西高校創設時から本校に12年間勤務し、本校を支えた伝説的な国語の先生ですので、今日は後輩である皆さんに、先生のお話をします。

### □橋口巳俊先生のこと

かなり個性的な先生でした。丸坊主に、裸足で、靴下を履かない人でした。いつも同じ無地のズボンに白いワイシャツ。ネクタイを着用した姿は一回も見たことがありません。冬は、昔、中国の人が着ていた人民服のような服を着ていました。先生と言うより、お坊さんのような感じの人でした。

初めて出会った日のことを私は鮮明に覚えています。入学が決まり、春休みに新入生登校日がありました。オリエンテーションの際、仮教室に入室し、やや緊張した気持ちで座っていると、さっきまで校庭で草刈りをしていたおじさんが教室に入ってくるではありませんか。このおじさんは何をしに来たのだらうと思ったら、おじさんの挨拶が始まりました。これが橋口巳俊先生だったのです。私は、失礼ながら、大声で笑ってしまったのを覚えています。

橋口巳俊先生は、国語の先生でした。私たちは「み

としさん」「みとし先生」と呼んでいました。私は高校時代に多くの先生の影響を受けましたが、やはり巳俊先生が一番強烈でした。当時、国語は「現代文」と「古典」に分かれていた時代です。私は先生に「古典」を教わりました。ややもすると、退屈になりがちな古典ですが、橋口先生の授業は知的好奇心を駆り立てるものでした。当時は、今の授業のように、話し合いとか、発表とかは少ない時代で、先生の講義が中心でしたが、大変内容が深く、大学の講義のようでした。生徒向けのプリントはすべて手書きでしたが、大変詳しく、緻密なもので、学者のような存在感がありました。私は勉強熱心な生徒ではありませんでしたが、先生のおかげで、古典だけでなく、国語が大変好きになりました。そして、私は、将来は巳俊先生のように、高校の国語の先生になろうと思うようになったのです。

### □教師になったの再会

その後、私は宮崎県の高校の国語教師になりました。初任校は、都城泉ヶ丘高校でした。しかし、大学で専門的に学んだにもかかわらず、現実の現場には様々な困難が待ちかまえていました。授業についても、大学で学んだ理論通りに行かないことばかりで、悩みを抱え、行き詰まった私は、ある時、思い切って巳俊先生に電話しました。巳俊先生は、私にとっては国語の教科担任ではありましたが、クラス担任ではありません。巳俊先生から見れば、私は、国語を教えた生徒の一人にしか過ぎません。しかも、私はできの悪い生徒だったのです。しかし、巳俊先生は、卒業生である私を自宅に招いてくれて、私に国語教育について、様々なことを丁寧に教えてくれたのです。

巳俊先生の自宅の壁面は、様々な本と、先生が作ったプリントのファイルに埋め尽くされていました。私は、それまで生徒として先生のプリントにお世話になっていましたが、その制作現場を見るのは初めての体験でした。緻密な教材研究とはこういうものなのでしょう。(校長室に現物があります。)私は、巳俊先生から、教材研究のやり方や、授業の方法、参考書等を教えていただきました。この助言のおかげで、私は何とか教師を続けることができました。

その後、巳俊先生は、創設以来12年間勤務した宮崎西高校から、当時私が勤務していた都城泉ヶ丘高校に転勤してこられました。私にとっては神様のような恩師が、今度は同僚になるのです。しかも、私と同学年の配属になり、私は恩師と一緒に国語の授業をすることになったのです。私は、今度は同僚として、先生の教えを直接請うことができました。初任時代をこのような素晴らしい先生と共に過ごすことができ、私としては大変幸運なことだったと思っています。

当時、巳俊先生は、宮崎から都城までJRで通っていました。車の免許を持たない巳俊先生は、通勤の時間を読書に充てていました。もし都城で車が必要になると、私が運転手を務めました。車が必要になるときというのは、都城郊外の歌碑や句碑を訪れる時でした。巳俊先生は、歌碑や句碑を訪ねては、こまめに分類、

整理をしていたのでした。このように、巳俊先生は生き方すべてが国語教育そのものでしたので、私は巳俊先生と国語教育以外のお話をするのはあまりありませんでした。

### □絵手紙を贈り続ける

しかし、巳俊先生には、私の知らないもう一つ別の顔がありました。それは、「おじいちゃん」の顔です。巳俊先生には息子さんと娘さんがいらっしやっただのですが、そのころ、娘さんが結婚されて、男の子を出産されました。巳俊先生は、おじいちゃんになったのです。

初孫の名前は「けんちゃん」と言いました。娘さんは県外出身の方と結婚されたのですが、ご主人の勤務地は宮崎で、けんちゃんが生まれた頃、宮崎市に暮らしていました。出産後からしばらくは常に巳俊おじいちゃんの家に入り浸りだったようです。巳俊おじいちゃんは、孫のけんちゃんを大変かわいがったのでした。

ところが、けんちゃんが3歳の時、ご主人の転勤のため、娘さん一家は福岡に引っ越すことになりました。けんちゃんがいなくなったことは、巳俊先生にとっても相当辛いことだったのではないのでしょうか。先生は、けんちゃんに、毎日絵手紙を書いて送るようになったのです。(現物はカラーであり印刷はできませんので、本校HPに掲載している校長通信には添付していません。見てみてください。)

絵手紙の内容は、日常の何でもない出来事が記されているだけです。中には、今日のお弁当が描かれているものもあります。サラサラと描かれています、味があるとは思いませんか。先生に絵を描く趣味があるなどということは、私は全く知りませんでした。

先生は、学校の昼休みなどの束の間のほんとした時間に、この絵手紙を書き、通勤のJRに乗る前にポストに投函していたようです。毎日、毎日送り続けられた絵手紙は、一枚とて同じものはありません。私は、そのはがきを見せていただきましたが、実に600通以上ありました。

先生は、言葉を愛し、本を愛し、その魅力を授業を通じて私達に伝え続けました。そして、お孫さんにも、「言葉」を贈り続けたのだと思います。葉書一枚書くことでも、続けるとなると大変なことです。それを、365日、休むことなく続けられたのです。

さらに先生は、奥様も大切にしておられました。毎年、お正月には、奥様にお手紙を書いて渡すのが恒例だったそうです。そこには、日頃は思っても、照れくさくてなかなか口に出せない奥様への感謝の言葉が必ず書かれていました。

### □さようなら巳俊さん

私は都城泉ヶ丘高校から転勤し、母校である宮崎西高校に赴任したため、巳俊先生と直接会う機会は減りました。それでも、私たち宮崎西高校卒業生と巳俊先生の交流は続いていました。巳俊先生が退職された年は、宮崎西高校の4回生が集まり、ささやかなお祝いの席を設け、記念の文集を作りました。その後は、互いに年賀状を交わすだけはありましたが、そこには昔と変わらない先生の文字がありました。

その巳俊先生が急逝されたのは、平成19年の6月のことです。晴耕雨読、暴飲暴食をするでなく、健康的な生活を送られていたので、お体が悪いなどは全く思っていませんでした。まさに青天の霹靂で、信じられない気持ちでした。もう一度お会いしたかった、何故もう一度集まりを持たなかったのか、そんな後悔でいっぱいでした。

初盆を迎えた夏、巳俊先生の供養として本を作りたいという話が、巳俊先生の息子さんから私たち宮崎西高校の卒業生にありました。巳俊先生がお孫さんに宛てた絵手紙をまとめて本にしようということになりましたが、息子さんとしては、一枚一枚に思い出がありすぎて、父の手紙を絞り込むことは、なかなかできないとのことでした。そこで、宮崎西高校の卒業生が集まり、編集に協力することになりました。巳俊先生の遺稿に触れると、そこには私達の知らなかった様々な先生の姿がありました。先生の思い出を語りながら遺稿を整理する時間は、ちょっぴり悲しいけれども、温かく安らかな時間でした。

この絵手紙集は、「みとし絵手紙集 大空からのたより」(鉦脈社)として出版されました。限定出版ですので書店等には置いてありませんが、故人の優しさ、温かさが伝わってくる本になっていると思います。

### □「大空」を引き継ぐ

私の中には、私の目標とする国語教師の形として、巳俊さんという先生がいます。このような素晴らしい国語の先生が宮崎西高校にいたことを、孫を愛した素敵なおじいちゃんがいたことを、家族を愛し、言葉を愛し、読書を愛した、すばらしい人がいたことを、後輩である皆さんにも知ってほしく、今回の通信を書きました。

私は、縁あって、生徒として、同僚として、巳俊先生と比較的長く過ごしたため、巳俊先生の遺品の国語プリントも私が引き取ることになりました。私には、巳俊さんのような力量はありませんが、残されたプリントを通じて、このような先生がいたことを、誰かに伝えることはできるのではないかと思ったのです。そして、私が、巳俊さんから頂いた数十分の一でも、先生方や生徒の皆さんに伝えることができれば、巳俊先生への、私のできる、ささやかな恩返しになると思っています。

ちなみに、校長通信の「大空」という題も、この巳俊さんが出していた国語通信の題をいただいています。内容は到底およびませんが、言葉を贈り続けた巳俊先生の思いを、ささやかながら引き継ぎたいと思ったからです。

### □出会い、そして美しい言葉を大切に

今回、岩切先生の講演でも、フランス文学に惹かれた理由として、美しい言葉への感動を挙げておられました。そして、岩切先生は、出会いを大切にしたいと語り続けておりました。私も、一人の先生との偶然的な出会いによって大きく自分の人生が変わりました。皆さんも、これから無数の出会いがあるでしょうが、一つ一つの出会いを大切にしたいと思えます。

秋晴れの校内には、爽やかな風が吹き抜けています。校内を巡回していると、高校1年生の夏の課題として、絵手紙の優秀作品が廊下に掲示してありました。村岡賞、斉藤賞、岩下賞受賞作品を筆頭に、思わずくすくと笑ってしまうような、心温まる作品が掲示されています。創設期、橋口巳俊先生が蒔いた、美しい言葉を大切にしたいという伝統が、本校国語科の中に息づいているような気がしました。高校1年生の皆さんにとっては夏の宿題だったかもしれませんが、絵手紙を送るような感性は大切にしたいものです。

美しい言葉、美しい思い。たしかに世の中はきれいな事ばかりではないかもしれませんが、しかし、この秋の大空のように、澄み切った心を大切にしていきたいと思っています。

## 橋口 巳俊 略歴

(本人の遺稿より抜粋)



昭和九年五月二十二日 出生

宮崎県児湯郡富田村大字三納代字比良。そこに我が家があり、近所の人は「みのじ」と呼んでいた。裏山には鬱蒼と竹や杉が茂り、庭先を出ると小川が流れていて、田圃には四季折々に働く人の姿があつた。ぼくを生んですぐに、母は乳房炎になり、乳を飲ませることもできなかつたと、ぼくが大きくなつてから母は何度も何度も悔いた。そのせいか母は、何となくぼくに気兼ねをし、ぼくも母に甘えることがなかつた。

昭和十六年四月

ぼくは富田国民学校に入学した。太平洋戦争が始まつた年で、まもなく父が出征し、母と祖父母が百姓仕事をしていた。新しく教わつた文字を使って本を読む面白さは、ぼくをとりこにした。だが、ぼくの生まれる三年前に火事を出したという我が家には、本らしい本はほとんどなかつた。ぼくは、本に飢えた。

昭和二十二年五月

富田中学校に入学。新制中学の一期生。校舎は、つい最近まで、青年学校の馬小屋だつたもので、何となく匂つた。隣の畑で鎌を持つていた小島の小父さんが日本史の先生、顔見知りの清の小母さんは家庭科の先生。奇妙な新しさのある学校だつた。

昭和二十五年四月

高鍋高校入学。カーキ色の兵隊さんのお下がり服を着て、下駄履いて、風呂敷包み持つて、自分では結構輝いているつもりだつた。

昭和二十八年四月

二八一三一一二(広島大学二十八年入学文学部文学科国語国文専攻、これがぼくの学生番号だつた。名前代わりに何度この番号を書いたことか。金がなくて、バイトばかりして、腹を空かしていた。それでも暇があると、古本屋回り。アカデミー・三

国書房・南海堂。ぶらぶらぶら歩きまわり、時々手に入れた古本を大事に抱えて帰つた。

昭和三十二年四月一日 教員採用(延岡向洋高校)

ポストンバックに下着を詰め込んで、南延岡駅に降り立つた。二度ほど道を聞いてやつと学校を探し当て、事務室で案内を乞うと、顔をのぞかせた女事務員さんが「卒業証明書ね。あんた、何年度卒業け?」と聞くので、「あの一、ここに雇われてきたのです。」と答えると、「排水工事のバイトじゃるか。」と思案顔。「あの一、教員です。新卒の教員です。」やつと納得してもらつた。しかし以後、何よりも自分で自分を教員と納得しないまままで終わろうとは。

背広もないまま、学生服で新任式に臨んだ。延岡向洋高校の校庭には、絶えず海鳴りの音が聞こえていた。好きな本が読みたい、それだけで国語教師の道につながつてしまつた。

昭和三十八年四月 延岡高校勤務

昭和四十九年四月 宮崎西高校勤務

昭和六十一年四月 都城泉ヶ丘高校勤務

平成七年四月 宮崎女子高校勤務(講師)

これが、ぼくの教員生活の軌跡です。その間素敵な若者たちが、さわやかに語りかけてくれたのに、ぼくは、口ごもつてばかりで終わりました。でも、若者たちの優しさで、ぼくはたくさんさんの豊かな時間を、自分の人生に加えることができました。本当にありがたい。

平成十九年六月十四日 肺炎のため死去

(大空のごとく)

大らかで

豊かで ありがたい

巳俊の言葉を遺して)

庭にとかげが「秋」

祖父の突然の死から三カ月経った今でも、全くその事実が実感出来ない。というのも、私がこれまで祖父から受けてきた寵愛（表現としては少々大袈裟かもしれないが……）が、まだ自分の記憶の中にはつきりとした形で残っており、それが今でも非常に鮮明な姿で思い浮かぶからである。それほどまでに私にとって祖父が、また祖父にとって私が極めて大きな存在であった為に、祖父の逝去が今一つ現実味を帯びないでいるのだろう。

祖父という人物は、私が子供の頃に、私に豊かな感性を与えて下さった方として、大いに尊敬できる人物であると思う。私が無事に大学まで進学出来たのも、祖父の指導が無ければまず有り得ないことだった。福岡と宮崎では距離的な隔たりが非常に大きかったにせよ、度々の里帰りで祖父に会うことによって、祖父の教えを確実に吸収していたのだと思う。私はこれからも、祖父の人間性の大きさを人生の目標と掲げつつ、今からの人生を精一杯生きて行きたい。

（南 健悟）



92年5月25日付



「おたより」11号



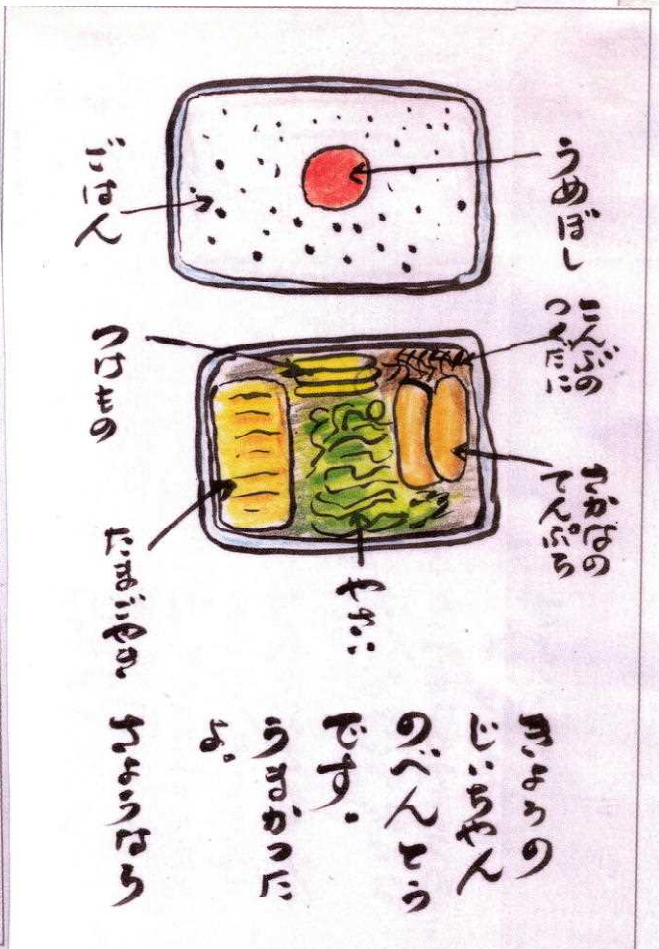
94年3月10日付



93年3月6日付



96年12月24日付



93年12月21日付



92年10月8日付



92年6月16日付

口高校1年生廊下に掲示された絵手紙

